地元では「当たり前」と思われている貴重な文化を世の中に伝えたい

高岡キャンパス近くの公民館では、毎年春になると獅子舞の練習が行われる。「お囃子の音が聞こえてくると、草木が芽吹くように人も『芽吹いている』と感じます」と嬉しそうに話す島添准教授の専門は民族音楽学。世界の音文化や音楽と社会の関係を研究しており、これまでに奄美諸島の民謡「シマウタ」の現状などの調査を行ってきた。

最近は富山の祭りについて研究をすすめている島添准教授。北陸地方は、富山県の氷見を中心として日本でも有数の獅子舞地帯であり、「百足獅子」と呼ばれる胴幕の中に10名近い人数が入って舞う様式はこの文化圏にしかない。また「雅楽」の演目が高岡の御車山祭りで「お囃子」の演目として残っていたり、城端では京都の曳山文化に「江戸端唄」が囃子として入っていたりと、江戸と上方の文化が合わさった例が見られるそうだ。

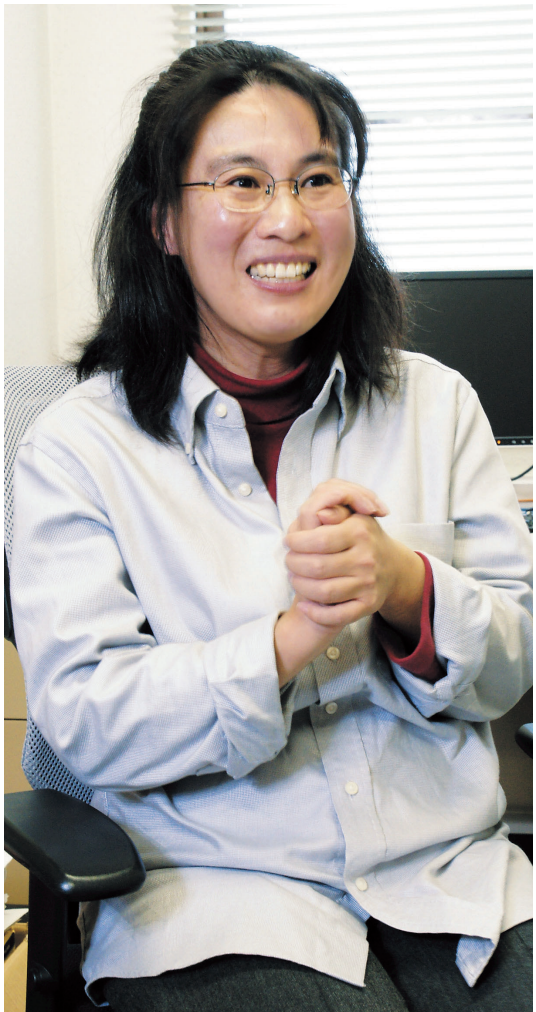
射水市の2つの祭りの曳山16基が描かれた「曳山手ぬぐい」と、フィールドワーク時に持ち歩くメモ帳。島添准教授の長年のデータが詰まっている。

島添准教授は「今後は、富山県をはじめ北陸地方に伝わる芸能の調査研究も行っていきたい」と語る。実は、今までに北陸地方の民謡や民俗芸能の音楽的な面についての調査はほとんど行われていないのだ。

技・音・芸能などの無形の財産を発掘して現代に活かす

その土地ならではの文化を理解するには、まずは文化そのものに触れることが重要だ。これまで島添准教授は、奄美諸島では住み込み調査を行い、富山でも県内各地に足を運び、行事や祭りに参加しながら情報を収集してきた。「フィールドワークの醍醐味は、地元の人にとっては『当たり前』の、しかしそれを知らない人にとっては新鮮な文化を学べること。今まで知らなかった文化に触れて「凄い」と感じるだけでなく、それを目に見える形で世の中に提示することが研究者の使命」と語る。「富山での成果も形に残せるよう、今後も自分の足でこつこつ調査し、データを蓄積していきたい。」と意欲を見せる。

また、島添准教授は文化政策や町おこしを専攻する文化マネジメントコースの学生に伝統文化論を教えており、「日本の伝統文化をいかに現代に活用するかといったことを考える機会が増えた」という。以前「新湊曳山祭り」を調査した際に、同行した学生が現地での取材や体験を通して成長していくのを見て「伝統との関わりが人を育てる」ということを改めて感じたそうだ。「技・音・芸能などの無形の財産を発掘して世の中に伝えたい。新たな切り口で伝統を再生し、未来へ残すために、地方の伝統文化を資源として掘りおこし、活かせる人材を現代に輩出したい」と語り、自身の研究はもちろん、学生の教育にもますます力を注いでいく姿勢だ。



音と地域が受け継ぐ文化を研究

芸術文化学部　准教授
島添 貴美子
しまぞえ・きみこ